
最強CHILD先生！？

ツチノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強CHILD先生！？

【Nコード】

N3871L

【作者名】

ツチノコ

【あらすじ】

エリシュオン

別名『学園都市エリシュオン』

その名のとおり中心に聳え立つ魔法学園エリシュオンを中心に広がる巨大な都市

更に隣接するようにそびえ立つのがエリシュオン王国だ

毎年数多くの生徒たちが立派な魔法使いになるためにここへ入学する

そして今年、新しい制服に身を包んだ生徒たちがこれからの学園生活に胸を膨らませながらやってくる

その中に黒いスーツを着た少年アルファ・ラグナイトが学園にやってきた

しかし、彼はギルドマスター兼学園長のティルアの要請を受けてやってきた。これはそんな少年が送る学園生活の物語

第零章 † 始動の刻 - トキ - †

「……………ぐう」

魔法列車に揺られ、美しい景色が足早に通り過ぎる中、気持ちよさそうに眠っている1人の少年

茶色の髪に所々入った金色のメッシュが窓から差し込む光に輝いている

黒いスーツのような上着に白いワイシャツのような服、オレンジのネクタイをしめ、上着と同じようなズボンをはいている

右手の人差し指には琥珀色の2つの指輪が光っている

やや童顔のため、女の子にも見えてしまうこの男の子

『間もなく終点、学園都市エリシュオンに到着します……………お降りの際は忘れ物のないように……………』

「……………んゆ？」

瞳が半分だけ開き、そこから琥珀色の瞳が姿を現す

「ふあああ……………やっと着いた」

背伸びをし、背骨が鳴るのを聞いた後、隣に置いてある鞆を持ち、列車から降りる

駅には黒い上着とズボンを着た男の子達、黒い上着に白い服、黒いスカートをはいた女の子達で溢れかえっていた。新入生なのか皆赤いネクタイを締めている

「……………ん」と、学園に行くには「おゝい！！アルゝ！！」あ、レイン」

アルと呼ばれた男の子に駆け寄るレインと呼ばれた女の子

「アル、お、おおおはよう！！」

「お早うレイン。君もここに通うの？」

レイン・アルジャーノ

漆黒の髪が腰まで伸び、赤いリボンで一つにまとめており、緋色が特徴的な女の子だ

「勿論よ！！しっかり勉強して立派なギルドの一員になるんだから！！」

レインの決意に燃える瞳に苦笑いを浮かべる

レインは子供の頃から今のような若干熱血漢な性格を持っていたため、男の子のようにさばさばとしていた。あれからだいぶ月日が経ったため少しはお淑やかになっているかと思いきや、寧ろ昔よりも男らしくなったのではないかと思うアルであった

ふと、レインの手の甲を見ると、そこには赤い光を放つ紋様が刻まれている

「あれ？レイン、もうガジェット持ってるの？」

アルに聞かれ、ちゃんとアルが見えるように手の甲をアルに向ける

「え？ああ、そうよ。ここに入学するときにお父様に作らせ……こほん、作ってもらったの」

きつと無理やり作らせたのだろうと心の中でレインの父を哀れむアルであった

「レインのお父様ねえ」

アルの脳裏には幼い頃のレインの父親の姿が浮かぶ

‡

今から数年前、アルがとある理由で街から離れることになった時、レインの家で起きた出来事だ

「アルうゝ、いつちやだよお！！」

泣きながらアルの服を離さないレインを優しくなだめるアル

「レイン、アル君にはやらなければならないことがあるんだ。だから少しの間、我慢するんだ」

「お父様あ」

レインの父親の言葉に渋々手を離すレイン。しかし、その瞳からは

どこにも行かないでとアルに訴えている

「いい子だね。少しの間の辛抱だ

アル君の花婿修行が終わるまで」

「はあああああ！？」

「ふえええ！？」

いきなり訳の分からない言葉を放つ父親に驚きを隠せない2人

しかし、レイン父の暴走は止まるどころか隣にいた母親をも巻き込み更に加速する

「そうね！！アル君なら安心してレインを任せられるわ！！」

「いや」

「安心したまえ、結婚式は盛大に行うからな！！」

「あの」

「アル！！私も花嫁修業頑張るからね！！ずっと待ってるから！！」

いつの間にか暴走空間に巻き込まれてしまっているレインも話に乗っかる

「アナタ！！新婚旅行は世界一周にしましょう！！」

「一周などでは物足りん！！好きなだけ世界を回るんだああああああああ！！」

何とかこの暴走状態を止めようとしていたアルだが、無情にも迎える魔法陣がアルの足下で光り輝く

「アル君！！しっかり勉強して立派な花婿になるんだぞ！！」

「婚姻届にはもうサインしてあるからね！！」

「アル！！大人になったらまた会いましょうね！！」

何故か自分の名前とサインが書かれている婚姻届を片手に手を振る家族達に見送られ、アルは街を離れた

「誰か、誰か助けてくださいー！！！！！」

※

「そっか、レインのお父さん達は元気？」

「ええ、元気よ！！あ、そうだった、お父様から手紙を預かってるの。また学園に着いたら見せるね」

周りの生徒達が慌ただしくなり始める。おそろくそろそろ時間なのだろう

「分かった。じゃあ、少し急ごうか」

「うん」

アルは道がわからないため、先に行くレインの後を走っていく
制服の内側から1つの指輪が落ちてしまったのにも気付かずに

「……………」

それを1人の女の子が拾っていたのにも気付かずに

「…………『騎士団』の指輪…………ふふふ」

怪しい笑みを浮かべながら学園へ歩いていく女性

すると、一瞬のうちに女性の姿は見えなくなってしまった

彼女が居なくなった後は誰もおらず、閑散とした状態であった

†

学園都市エリシュオン

エリシュオン王国を中心に広がる世界有数の学園都市

都市の中には地方から流れてきた労働者達が各々の店を開き、日々競い合っているため、品物の質が非常に高い

特に武器や指輪などの魔法具は世界で1、2を争うほどのものだ

そんな都市の王国の隣にそびえ立つのが学園エリシュオンだ

この学園では主に戦士科、魔術科の2つに分かれており、その中で更に剣術科や槍術科など自分の好みに合わせて選択することが出来る

そして、その中で優秀な成績を修めた者は学園直属のギルドからスカウトを受け、ギルドの一員となれる

また、その他にも様々な職種の選択をすることができるのだ

ここで、この学園、いや、世界の戦闘スタイルについて説明しよう

この学園では生徒達は学科を選択した後、ガジェットと呼ばれる武器を精製する

このガジェットと呼ばれる武器を使い、戦闘訓練を行う

また、どのガジェットにも小さな窪みがある

ここで登場するのが指輪だ

指輪とはアクセサリもあるのだが、この学園都市には主に戦闘に

使う指輪が占めている

指輪は装着された石の色によってそれぞれ属性がある

赤は火

青は水

緑は風

黄色は雷

琥珀色は土

水色は氷

属性は主にこの6つなのだが、中には特殊な指輪もあるが、それは後々話すでしょう

指輪には装着した状態で魔法を放つことも出来るが、ガジェットの窪みに魔力を流した指輪をはめることでガジェットの力をより大きくすることが出来るのだ

また、指輪には使われている石によってランクがある

ランクによっては使える魔法に限界がある物もある

そのことをどうか覚えていてほしい

さて、学園に向かっていたアル達はちょうど学園の中の大ホールの

中にいた

そこには今年レインのようにエリシュオンに入学する生徒達でこつた返しになっていた。アル達は遅く来たため、前のほうは既に数多くの生徒達で埋め尽くされている

「やっぱり王国の隣だけあって凄いわね」

王国の隣ということで、外装は王国に負けないような城、純白をベースにした内装に床にはレッドカーペットが敷かれており、もはやこちらがエリシュオン城なのではないかと疑ってしまうほど立派な建物だ

（こんなものために皆の税金が使われているんだなあ）

「どうしたの？アル。早く学科選択に行こうよ」

「あ、ごめん。すぐにいく」

レインはアルの手を引きながら生徒達がこつた返す中にあるだろう学科選択の場所に向かっていく

‡

大ホールの中もかなりの人数だが、学科選択の場所が最も生徒が集まっている。おそらくまだ学科を決めかねている生徒達がいるのだろう

「アルはどうするの？戦士科？魔術科？」

「うーん……まあ、ぼくは……それよりもレインは？」

「私は戦士科にしようと思ってるの。ガジェットも丁度近接向けの
だったからね」

若干うれしそうに笑みを浮かべるレイン。アルもそれにつられて顔
に笑みが浮かぶ

「それにしてもすごい人だね」

「学園都市だからねえ。そういえば知ってる？さっき噂で聞いたん
だけど、エリシュオン王国の姫様もお忍びで入学したらしいわよ」

パリーン

その言葉にアルの背景が硝子のようにひびが入る

「レイン、それ本当？」

「うーん、私も噂だから分からないけど、多分本当じゃない？」

どうか噂であってほしいと思っていたアルだが、現実はそんなに甘
くはないようだ

「アル様あああ!!」

人混みを掻き分けて黒い何かがアルの鳩尾に突撃する

「ぐふっ!!」

苦しみながらも黒い何かを抱き留めるアル。黒い何か、漆黒の長い髪を腰まで伸ばした女性がアルに抱きついていていた

「アル様！ーアル様アル様アル様あああああ！ーお会いしたかったですうつうつうつ！ー」

嬉しそうに鳩尾グリグリと額を押しつけアルに地味にダメージを与えているが、アルはそんなことを思っている場合じゃなかった

（やばいやばいやばい！ーえ？何がやばいって？そんなの………レインからの殺気に決まってるじゃないか！ー！）

背後のレインから発せられるどす黒いオーラを背中に直接浴び、背筋が凍り付くどころか既に氷河時代。マンモスも恐竜もびっくりするほどの寒さだ

「………アル、その人は誰？私というお嫁さんがありませんながら浮気？浮気なの？ねえ、ねえ」

レインの瞳から光が消失し紅蓮に輝く手の甲の紋様から

レインの等身大の大きさの斧を引き抜いた

‡

（うわゝ女の子に似合わない武器だなゝ。そういえばレイン、昔から力が強かったもんなゝ）

どす黒いオーラを放ちながら段々近づいてくるレイン。1歩進むごとに1歩づつ下がっていくアル

「ねえ……どうして逃げるのかな？かな？」

光を失っていたレインの瞳に狂気の色が表れる

斧の先端からはレインの魔力を感じてか全体が炎に包まれている

何が起こったのか分からない生徒達は急に室温が上がったことに疑問を覚え、レインとアルの周りにいた生徒達は自分に被害が及ばないように一定の距離をあける

（マズいなあ、あんまり目立ちたくなかったんだけど）

何かを決意したかのようにアルは上着の内側に手を入れ、そこにあった『はず』のモノを取りだそうと手を動かす

しかし、皆さんはご存じの筈だ。アルが探しているのは既に駅の水

ームで落としているのだから

（あれ？またどつかで落としちゃったのかな？またあの人に怒られちゃうよお）

どうやらアルは今までに何度もあの指輪を落としているようだ

（うーん、ここでガジェット出すのは別にいいんだけどなあ）

「そこまです」

不意に聞こえた女性の声と同時にレインが持っていた斧が紋様の中にひとりでに消えていく

「……………え？」

「全く、アナタは何をしているんですか？生徒達よりも早く着くように言っただでしょ？」

（こゝ、この声は）

錆び付いた機械のようにギギギと後ろを振り向くアル

そこには白銀の長髪に漆黒の瞳を持つ女性が双銃を紋様の中にしまい込みながら額に青筋をうかべていた

「団ちょ「ギロリ！！」……………が、学園長」

「うんうん。さて、あなたは確か、レイン・アルジャーノさんかしら？ガジェットを見せびらかすのはいいいけど場所を考えてね？」

アルの背後に慌てて隠れながら猛スピードで頭を下げる

「それと……アズサ、いい加減アルから離れてあげなさい」

「イヤです！！私はアル様と「ね・え♪」了解しました」

アルから弾かれるように離れ、敬礼をするアズサ

それもそのはずだ。いつの間にかアルに抱きついていているアズサの背後にティルアが現れ後頭部に銃をつきつけたからだ

「さて、では行きましょうか。アルファ『先生』」

「あ、はい」

レインとアズサに背を向けて歩き出す女性のあとを小走りで追い掛けるアル

『ええー！！せ、先生いー！！！！！！？？？？？』

†

「団長、助かりました」

「全く、正体を隠せとまでは言わないけど、あまり目立たないようにしなさいよ」

ため息をつきながら指輪を外す女性

この女性はティルア・サヴィナージュ。アルの所属する騎士団の団長を務めている人だ

ガジェットは先ほどみたように漆黒の双銃。属性は非常に珍しい闇属性

であるから、彼女が持つ指輪の石は主に透き通るような黒だ

また、騎士団に所属する者の上位（一桁ナンバー）に位置する者には2つ名が与えられている

アルは『王土の騎士』

そして、団長のティルアは『月光の女騎士』

という属性にちなんだ2つ名を持っている。ちなみに騎士団の上位クラスの者にだけ、アルが落とした指輪が与えられている

「で？指輪はどうしたのよ。まさかまた落としたんじゃないでしょうね？」

「ははは、すみません。そのまさかです」

額に手を当ててため息をつくティルア。アルは申し訳なさそうに頭を下げた

「全く、少しは気をつけてよ？あの指輪、認められてない人がつけると暴走するんだから」

†

レイン達がいる大ホールの片隅に壁にもたれながらそれを眺めている女

「ふん、何故ワタシがこんな薄汚い庶民どもと学園生活を送らねばならんのだ」

この女の名はルルア・イシュザール

学園都市エリュシオンの高級住宅街に住む貴族、イシュザール家の長女であり、将来イシュザール家の当主になる者だ

金色のショートヘアで前髪を緑のヘアピンでとめ、ややグリーンがかった瞳に談笑する生徒達の姿が映る

（しかし、思い掛けない収穫もあったがな）

制服のポケットから取り出したのは先程駅のホームで拾ったアルの指輪

（これをつけていればワタシは騎士団の一員に見られるに違いない。

そうすればこの学園でのワタシの地位は確かなものになるはずだ)

不敵な笑みを浮かべながら指輪を指に通そうとしたその時

- 汝の名を唱えよ -

「え？」

不意に聞こえてきた声に辺りを見回すが誰も自分に話しかけているようには見えない

- 我は王土の騎士の証である指輪。付けるのならば汝の名を唱えよ -

そう、聞こえてきた声を発していたのは指輪からだった

(王土の騎士！？あの騎士団の中でも最強と言われている人じゃないか！！これをつければ……………ワタシは王土の騎士になれる！！)

他の人に聞こえないようにこっそりと指輪に自分の名前を唱える

「ワタシの名はルルア・イシュザールだ。今日からワタシが王土の騎士 - 王土の騎士を名乗る不届き者に裁きを与える - え？キヤア！
！」

指輪がバチンとルルアの指から弾かれるように離れ、床に落ち、琥珀色の煙を噴き出す

⚡

「なんだ？」

「なに？この煙」

突然噴き出した琥珀色の煙に周りの生徒達がザワザワと騒ぎ出す

琥珀色の煙は噴き出しながら何かの形を描いている

その煙はだんだんと大きさを増していく

「な、何だ！？何が起きているんだ！？」

混乱に陥っているルルアはただただその煙を眺めているしか出来なかった

†

「ん？この気配は」

ティルアと歩いていたアルは先ほどまで生徒達と一緒にいた場所から何か殺気のようなモノを感じ取った

「はあ、やっぱりか……………アル、早く行かないと生徒が危ないぞ」

想像していたことが現実となったのか面倒くさそうにため息をつく

「あらら、団長の予想通りになりましたね」

「そんなことを言っている暇があったらさっさと行きなさい」

「へいへい」

†

膨張した煙が破裂すると……中から巨大な仁王像が現れた

『我は王土の騎士の番人。勝手に王土の騎士を名乗った者に裁きを与える』

仁王像の瞳がゆっくりと生徒達の奥、その姿に怯えているルルアに向けられる

「ひい」

小さな悲鳴をあげ、ルルアの膝がガクガクと震え出す

『裁きを「しなくていいから寝てなさい」』

仁王像の横から飛んできた鉄球のようなものに腹部を抉られる

『ぐあああああ』

「はい、トドメ」

仁王像の頭上で何かが光った後、頭部から縦に真つ二つに切り開かれた仁王像がそこにいた

切り開かれた仁王像はやがて琥珀色の光となって指輪の中に消えてしまった

仁王像の入った指輪を手に取り指につけるアルの姿が生徒達の視線の焦点になっていた

「やれやれ、やっと見つけたよ。全く、君は直ぐに暴れ出すんだから。この世の中、もうちょっと明るく行かないとダメだよ？」

- 我はやるべきことをやった。それだけの話だ -

アルに文句をつけたのち、仁王像の声は聞こえなくなった

「はあ、彼もいい奴なんだけど頭が固いからなあ」

「あの、さっきのは？」

アルの後ろにいた生徒が先程の光景についてアルに問いかける

アルが周りを見渡すと、レインを含めた多くの生徒達の視線が集中していた

先程あまり目立つたと言われたばかりなのだが、かなり目立ってしまっている

「え」と『皆さん新任教師による入学祝のイベントはいかがでしたか？』

マイクを手に取り、生徒たちに先ほどの出来事を誤魔化そうとする

「へえ、そうだったんだ」

「確かに迫力満点だったよな!!!」

生徒たちの大半がティルアの言葉を信じ込み、アルに拍手をする。それが全体に広がっていき、スタンディングオベーションとなっていた

「あはは、あんまりこういうの慣れてないんだよねえ」

照れくさそうに頬をかくアル。そして、ティルアの下へ生徒たちを掻き分けて進んでいく

そして、アルがティルアのもとに到達すると、彼女の後ろには様々な年齢層の教師らしき人たちが立っていた

『皆さんご入学おめでとうございます。私がこの学園の学園長のティルア・サヴィナージュです。皆さんはこれからここで様々な事を学び、将来に向かっていくことでしょう。私が皆さんに伝え事は1つだけです。とにかく学園生活を充実したものにしてください。どんなことでもいいです。勉強、鍛錬、恋愛でもいいです。とにかく学園生活を楽しんで下さい。私からは以上です』

ティルアが頭を下げると生徒たちからの盛大な拍手が巻き起こる

『ではこの後は各教室に向かい、担当の教師に従ってください』

わいわいと友人などと喋りながら自分たちの教室に向かっていく生徒たち

それを見届けたティルアはアル達の方に振り向く

「では、戦士科の方は戦士科のほうに、魔術科の方は魔術科の教室に向かってください」

ティルアの言葉にアル以外の教師たちはそれぞれの担当の教室に向かっていく

「……………あの、団長、僕は？」

「あんたは戦士科よ、レイラ先生、こいつも一緒に連れてってくだ
さい」

「分かりました」

金色のショートヘアに緋色の瞳、片目には大きな切り傷が出来て
いる。体系はいわゆるモデル体系で出るところは出ており、引ッ込
んでいるところは引ッ込んでいる

「アルファ先生でしたっけ、レイラ・エルフォミアですよろしく
お願いします」

「アルファ・ラグナイトです。気軽にアルと呼んで下さい」

「はい、ではアル先生、戦士科の教室に行きましょうか」

はっといと手を挙げてレイラのとをついていく。レイラはまだ子供
のアルがカルガモの子のようについてくる姿に頬が緩む

「……………学園長」

それを見ていたティルアの背後から魔術科の教師が呼びかける。う

しろを振り向くと納得のいかない男性が立っていた

「やはり納得いきませぬ！！あのような子供が生徒達を導けるとは
思いません！！」

「大丈夫よ」

「何が大丈夫なものですか！！あんな子供に「あれが私のギルドの
エースでも？」な！？」

この学園の教師たちはティルアが騎士団の団長であることはすでに
理解している。しかし、まさかあのような子供が騎士団のエースだ
とは思いつかなかっただろう

「王土の騎士、アルファ・ラグナイト。騎士団でエースと呼ばれる
一桁ナンバー03を持つ子。属性は土。武器は……………」

そこにはアルの顔写真の貼られたギルドメンバー表があった。これ
にはさすがの教師とて認めざるを得ない

「ね？大丈夫そうでしょ？」

ウインクしながら問いかける学園長に首を縦に振るしか出来なかつ
た

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3871/>

最強CHILD先生！？

2010年10月14日21時45分発行